大きな海の小さな恋

藍川コハク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
大きな海の小さな恋

【Ｎコード】
Ｎ４７５２ＢＡ

【作者名】
藍川コハク

【あらすじ】
…小さな恋ってありますか？
季節は秋。海の街で男子高校生が淡い恋心を抱く。
彼女との７日間の恋の行方は…。

短いです。
まだまだ未熟ですがぜひ読んでください

大きな海の小さな恋

海を見ながら歩いていると浜辺に座ってじっと海を眺めている少女がいた
よく見るとその少女は俺の学校の制服を着ていた
「なに、してんの」
「海、見てる」
透き通るような声だった
海に視線を向けたまま、少女は答えた
…あれ、誰だっけ―――
靴と靴下を脱いで、足だけ波に浸かっていた
「なんで」
「好きだから」
言ってからやっと顔をこちらに向けた
「貴方も好きでしょう？」
ドクンと心臓が跳ねたのは気のせいだと思う
「まあ…好きだよ」
すぐ隣に置いていた靴を避けて、座る？と俺に場所を譲った
そうされると座るしかない
大きな波の音が聞こえた
「冷たくないのか？」
足を指さしながら聞いた
「冷たい」
少女は即答した
だが足はまだ波に浸けたままだ
手を波に浸けると水は冷たかった

夕日は水平線に沈んだ
「今日の太陽もキレイだった」
「あ？あぁ」
言いながら少女は靴だけを履いた
俺も立ち上がった
じゃ、と少女は別れを告げたが俺は最後にもうひとつ聞いた
「名前、なんていうんだ」
「…名前、かぁ――――」
それまで即答してきた少女がこの問いに言葉を濁した
「覚えなくていいよ
私も貴方の名前、聞かない」
少女は哀しそうに微笑んだ

名前を知ろうと思えばすぐに知ることができただろう
だが俺は敢えて調べなかった
少女の第一印象は変わったヤツ、だった
けれど鼓動は高鳴るばかりだった
それから一週間、俺は学校が終わってから日没までの間少女と海を眺めた
俺の中では海の存在が大きくなっていった

7日目の別れ際、少女は言った
「ありがとう」
なぜか礼の言葉を述べた
俺にはその意味がわからなかった
ただ胸があたたかくなるのを感じた
「…あのさ、私――――いや、やっぱいいなんでもない」
言いかけて少女はやめた
「なんだよ、それ」

少女の顔は少し赤かった

8日目、少女は来なかった
風の噂で引っ越したと聞いた
どうやら内陸部らしい
それですべてがわかった気がした
おそらく少女は海を見るためここに通い続けていたんだろう
昨日と同じ場所に立つ
初日のやり取りを思い出す
きっと、もうすぐ引っ越してしまうから名前を覚えても意味がない、
と教えてくれなかったんだろう
けれど短く、小さいかもしれないが、恋をしていたと思う
あんな気持ちになることはもうない
”好きだから”――
あの日、少女は海が好きだと言った
俺も本当に海が好きになった
だから最後に…

大きな波の音が聞こえる
夕日が沈む頃だった
少女に伝えるつもりで口にした
「好きだよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4752ba/

大きな海の小さな恋

2012年1月12日23時56分発行